

領解末代念仏授手印抄

書下文

## 〈凡例〉

- (一) 本訓読は、林彦明校訂『昭和新訂 三卷七書 全』（第四版、昭和十八年、総本山専修道場）を底本とした。
- (二) 漢字表記は、平易を旨とし可能なものは常用漢字に改めた。
- (三) 本訓読中、改行は内容に応じて適宜施した。

領解末代念仏授手印抄

『末代念仏授手印』とは、蓋し浄土宗の肝要なり。これに依つて、瑞夢の告、一に

非ず。より信ずる者これ多し。沙門然阿幸いにこの文を伝え、輒くその義を受く。領

解の分、聊か一隅を記す。問う、章疏の名、所以無きに非ず。今、末代と云う。何

の意有りや。答う、源空上人、鶴林の後、仏智弘願その義大いに乖き、念仏称名そ

の行、やや廃せり。これを顧みてこれを作れり。故に末代と号するのみ。問う、手印

とは、真言より起れり、浄土宗の中に何ぞ恣にこれを用ゆるや。答う、世間の王

法、なお齒印、手印有り。いまだ疑とするに足らず。

五種正行。問う、五種正行の本文、云何。答う、文に云く、「正行と言うは、専

ら往生に依つて行を行ずるは、これを正行と名づく。何者かこれなるなり。一心

に専らこの『観経』『弥陀経』『無量寿経』等を読誦し、一心に彼の国の二報莊嚴

を専注・思想・觀察・憶念す。もし礼するには、すなわち一心に専ら彼の仏を礼し、

もし口に称するには、すなわち一心に専ら彼の仏を称す。もし讚歎供養するには、す

なわち一心に専ら讚歎し供養す。これを名づけて正と為す。文問う、文中にすでに

一、二等の言無し。何ぞ分ちて五と為すや。答う、文中に一、二の言無しといえども、一心の下、五義分明なり。問う、誦誦正行と上品と何の別有るや。答う、寛狭の別有り。問う、觀察正行は、十三觀に通ずるや。答う、通ずるが故に文に、二報莊嚴と云えり。二報と言は、一には正、二には依なり。依に前の七を撰し、正に後の六を撰す。問う、『經』には十三を明す。『釈』、何ぞ仏のみを觀ずるや。答う、多少の觀は行者の心に在り。故に仏を觀ずといえども、還つて十三を指す。問う、禮讚と供養といまだ往生と云わず。答う、經文には、隠れたりといえども論の説いよいよ顯なり。

助正分別。問う、本文云何。答う、文に云く、「この正の中に就いて、また二種有り。一には一心に専ら弥陀の名号を念じ、行住坐臥に時節の久近を問わず、念念に捨てざる者、これを正定の業と名づく、彼の仏の願に順ずるが故に、もし礼誦等に依るをば、すなわち名づけて助業と為す」。文問う、觀は定、余は散なり、散はすなわち方便、定はこれ正觀なり。今、何ぞ還つて散善の称名を以て、名づけて正業と為し、定善の觀察を名づけて助業と為す。正助の義、その相如何。答う、口称の一行は、彼の仏の願に順ずる故に、名づけて正と為す。余の四種の行は、仏の本願に非ず。故に正助の義、余業に同じからず。何にいわんや念仏は、定に通じ、散に

通ず。何ぞ散に局ると難ぜん。もしは定、もしは散、ともにこれ正業なり。云

三心横豎の意、これを思つて知るべし。

一に至誠心とは、虚仮心を治す。ここに三種の四句有り、一には虚実の四句、二

には多少の四句、三には始終の四句なり。初めに虚実の四句とは、一向虚仮心

内虚外実全 一向真実心内外とも実 虚実俱具心半実半虚 非虚非実心未だ浄土に帰せ 次に

多少の四句とは、多虚少実往生を 多実少虚もしは往 多少俱実決定 多少俱虚全く往

後に始終の四句とは、始虚終実往心 始実終虚退者 始終俱実往生 始終俱虚全く往

二に深心とは、狐疑心を治す。上に准じて三種の四句有るべし。初めに信疑の四句

とは、一向疑心生せず 一向信心決定 信疑俱具心不定 非疑非信心全く往 次に多少の

四句とは、多疑少信往生を 多信少疑もしは往 多少俱信決定 多少俱疑全く往 後に

始終の四句とは、始疑終信往心 始信終疑退者 始終俱信決定 始終俱疑全く往

三に回向発願心とは、回向は行を兼ね、発願はただ願なり。不定回願の心を治す。

まず行願の四句有り。有願無行、有行無願、有願有行、無願無行、また上に准じて

三種の四句有るべし。初めに西方余事回願の四句と言は、一向西方回願往生 一向

余事回願全く往 二俱回願不定 二不回願全く往 次に多少の四句とは、多西少余回願

もしは往 多余少 西回願得ず 多少 西方回願決定 多少 余事回願全く往 後に始終の

四句とは、始西終余回願下種、始余終西回願往生、始終西方回願往生、始終余事回願全く往願生せず。本書には略を存じて、僅かに七種を挙ぐ。ただ意を得るに在り。煩わしければ、委しく載せざるのみ。今十種の四句を作つて、また至誠心に准ずるのみ。もしまた委しくこれを知らんと欲せば、三心に各二種の四句を得。謂く、上の一向と多少と始終とに并んで互いに四句を作る。故に爾なり。一には一向実を以て多少虚実に対する四句なり。二には一向虚を以て多少虚実に対する四句なり。初めの四句とは、一には始めは一向実、終りは多虚少実、二には始めは多虚少実、終りは一向虚。三には始めは多実少虚、終りは一向実。四には始めは一向実、終りは多実少虚。後の四句とは、一には始めは一向虚、終りは多虚少実。二には始めは多虚少実、終りは一向虚。三には始めは一向虚、終りは多実少虚。四には始めは多実少虚、終りは一向虚なり。

深心の中の初めの四句とは、一には始めは一向信、終りは多疑少信。二には始めは多疑少信、終りは一向信。三には始めは一向信、終りは多信少疑。四には始めは多信少疑、終りは一向信なり。後の四句とは、一には始めは一向疑、終りは多疑少信。二には始めは多疑少信、終りは一向疑。三には始めは一向疑、終りは多信少疑。四には始めは多信少疑、終りは一向疑なり。

回向心の中の初めの四句とは、一には始めは一向西方、終りは多余少西回願。二には始めは多余少西、終りは一向西方回願。三には始めは一向西方、終りは多西少余回願。四には始めは多西少余、終りは一向西方回願なり。後の四句とは、一には始めは一向余、終りは多余少西回願。二には始めは多余少西、終りは一向余回願。三には始めは一向余、終りは多西少余回願。四には始めは多西少余、終りは一向余回願なり。已上六種の四句なり。上の十種に並べて合して十六の四句を成ずるなり。

問う、上來挙げる所の多種の四句同異如何。答う、初めの四句の中において前の三句を以て次の四句を作る。前の二句を以て後の四句を作るなり。問う、初めの三と次の四と相對云何。答う、初めの一はすなわち次の四なり。初めの一はすなわち次の三なり。初めの三はすなわち次の二なり。多少有るに依つて自ら二を成ず。初めの四はすなわちこれ更に相對無し。問う、初めの二と後の四と相對如何。答う、初めの一はすなわち後の四なり。初めの一はすなわち後の三なり。もし後の一、二をただちに初めの二に對するに、理において差有り。初めはすなわち一向、後はすなわち虚実なり。故に初めの二を合して、後の一句を成ず。謂く、始虚は、すなわちこれ一向虚仮なり。終実は、すなわちこれ一向真实なり。故に初めの二句相成して、

自ら後の一句と為る。後の二もまた然なり。また始終合論すれば、自ら初めの第三の句に当たる。問う、もし爾らば彼此の四句混乱す。何ぞ言論を費やすや。所詮無きに似たり。答う、衆生に種種の心有ることを知らしめんが為に苦にその異を尽くす。多言を厭うこと勿れ。ただし少乱有ることは四句を成ぜんが為なり。更に尽りに非ず。多少始終相對の故に爾なり。問う、虚実俱具とおよび始終虚実の二句と何の別有りや。答う、虚実俱具とは、半実半虚、時に随つて不定なり。始終虚実は、初後改変し虚実決定する。問う、多実少虚の者は一向に浄土に往生すべからず。たとい少分なりといえども、虚仮有るが故に。答う、衆生の心識いまだかつて定住せず。譬えば野馬のごとくまた猿猴に似たり。一たびは虚心を起し、一たびは実心を起す。実心多きが故に、命終の時に臨んで至誠心を具せばすなわち往生を得。虚を具してまさに浄土に生ずと謂うには非ず。問う、人命不定なること電光草露なり。何ぞ旦暮を待たん。もし虚心を起して、すなわち命断絶せばこの人、云何して往生することを得ん。答う、実に爾なり。故に不定往生なり。一向真実の決定往生のごとくにはあらざるなり。後の二心准知せよ。問う、一向疑心の下の註に、「若得一分往生」と云うの義、いまだその意を解せず。答う、衆生の根縁不可思議なり。行業果報もまた不可思議なり。一向にこれを疑い、一向にこれを行じて、すこぶる生ず



るもの有らんか。一途を執すること勿れ。云 已上 有るが云く、疑えばすなわち華開かず、この義に合会すべし。私に云く、導師の釈に違す。云 問う。『大経』の胎生、この義に合すべきや。答う、彼れは罪福を信ず。一向疑心と云うべからず。問う、『十住論』には、疑心往生を許し、『礼讚』の文には、即不得生と斥う。この一義云何が通釈せん。答う、二文、水火せり、会通何ぞ易からん。一には云く、余法を疑うといえども、なお一行を信ず。信に依つて生ずることを得れども、余法を疑う。故に「疑即華不開」と云うか。一には云く、起行を疑うといえども、なお安心を具するか。問う、三心すでに具すれば仏これを護念したまう。何の退縁有つてか更に退転すべきや。故に文に「蒙光触者心不退」と云う。何ぞ心の退不退に就いて、まさに四句を立てるや。答う、凡夫の行者は、進退、縁に随う。仏力もまた加すべきに加す。十信なお退す。何にいわんや信外をや、譬えば軽毛の風に随つて東西するがごとし。心不退とは、且く不退の者に約してこれを釈するなり。もし三心を具して必ず退せずんば、何ぞ四修を以て三心を用策せんや。五念門は『往生論』に在り。四修は『礼讚』および『要決』の中に在り。源、『撰論』より出たり。三種行儀の名目は、ほぼ『往生要集』に出たり。行状はまた『観念法門』に在り。三心・五念・四修皆これ称名なる所以は、細しく尋ねて了すべし。もし能く知らんと欲せば必ず口授を須い

よ。これを筆点ひつてんに題だいすることを得えざれ。

領解りょうげ末代まつだい念仏ねんぶつ授手じゆしゆいん印抄しんしょう

嘉禎三年八月三日、善導寺ぜんどうじにおいてこれを草記そうきする処ところなり。上人しやうにん、親まのあたりこれを見みたまいて合点がてんしたまい畢おわんぬ。

沙門しやもん然阿ねんな 在御判ざいごはん

この中に安心あんじんの疑心ぎしん、起行きぎやうの疑心ぎしんとは、後のちにこれを書かき加くえるなり。重重じゆうじゆうの四句しきく、苦ねんごろに能よく能よく心こころを留とどめてこれを見明みあきらむべし。

右第三重みぎだいさんじゆう記主きしゆ上人しやうにんに任まかせて、御制作おんせいざくせり。弟子でし聰そう誉よに伝授でんじゆせしめ已畢おわんぬ、この旨むねを守まもり弘通くわうづうすべき処ところ、件くだんのごとし。

嘉吉二年壬戌かきちにねん壬戌五月一日ごがつついたち

明みやう 誉よ 花押はなおし